

◆【海員随想】二つの救命胴衣② 石橋 正

急速な低気圧は発達しながら接近、風浪も急に強まって、ワイヤー2本が切断され、船は糸を切られた凧のようであった。激浪のたたきつけている険しい崖にぶつかったら万が一にも助からない。

「エンジンよ、早くかかってくれ」と祈っていた

戦時中に造られた本船のエンジンは粗悪な材料が使われており、予測もできないような箇所が突然損傷したりして機関長を悩ませていた。また、始動するときも、1度失敗すると2人がかりでターニングバーのフライホイールを始動マークの所まで回さないと起動できず、次に回すためには数分間の準備時間を必要とし、もし、このとき起動できなかったら絶壁にたたきつけられること必定という至近距離であった。

あとで機関長から聞いたことだが、本船のエンジンは寒いときには特に一発で即座にかかることは珍しいのだが、このときは機関部員と一緒に寝間着のまま機関室に飛び込んで、「エイ、ヤッ！」とやったら奇跡的に1回で回り出してくれたということで、まったく幸運としかいいようのないことであった。

私がブリッジで「南無三！」と観念したときに、ドドーツと船体をふるわせてメインエンジンがスタートした。うれしかった。エンジンが回ってくれば何とかかなると思い、私は「頼むぜ！」と声を出しながら、テレグラフを「全速後進」に勢いよく回した。

船尾から大浪を受けながらも船はジリジリ後退し、絶壁から少しずつ、しかし確実に離れていった。とにかくエンジンがかかれば少々シケは平気だ。

今まで2、3昼夜ぶっ通しで船を波に立てていたこともある。しばらくして、私はデッキにいた乗組員を退避させ「前進全速」を指令するとともに舵を大きく回して船を反転させ、闇夜の中で真っ白に砕ける波頭の方に船首を向け、得意の「支え」の態勢に入った。

ところが、この低気圧は津軽海峡付近で急に発達したらしく、波はますます高くなり、うねりの頂上が崩れるようになってきた。運用学では「シーアンカーを入れ、船首の便所から油を流せば波が静まる」なんてことを習ったが、軍事学の方ではそんなことは書いてなかった。「とにかく波に突っ張れ」といわれた。

猛烈な上下動、船首部の底が叩き壊されそうなウォーター・ハンマーの衝撃。しかし、船はその中をたくましく突き進んでくれた。